

# キリスト教の終末論における将来的なものと現在のなもの

原 田 博 充

## 一、武藤先生への感謝——私の研究計画とその中断

私は、一九六〇年（昭和三五年）文学部三回生になって基督教を専攻した時から、一九六七年三月大学院博士課程を修了する日まで、武藤一雄先生の御指導のもとに、基督教を研究した（学部の間は、有賀鐵太郎先生が教授、武藤先生は助教であられた）。この夏「基督教研究・故武藤一雄名誉教授記念号」への執筆依頼を受けたとき、先生より受けた学恩への感謝をあらわすために、この度は何としても寄稿すべきであると直観した。しかしながら、人の思いを「高く超えている」（イザヤ五五・九）主なる神の御計画によって、私は、一九六六年二月、博士課程在籍中に、従来属していた教会を出て、今日単立京都みぎわキリスト教会となった新しい集会を興すことになり、この教会の形成にすべてを献げることになったので、その日以来、学的探求の営みは、私の生活の中で従たる位置を占めることになり、やがて伝道・牧会、そして生活を支えるための教育職の多忙にまぎれて、事実上研究活動を殆ど放棄せざるを得なくなった。こうして瞬く間に三〇年という久しい歳月が過ぎたのである。京都みぎわキリスト教会誕生に至る過程で、私は個人的に先生から数々の御指導・御助言をいただいた。その中には、京都みぎわキリスト教会

の礎を据える役割を果たした数々のお言葉があった。私としては、先生より受けた学問上の御恩と並んで、この時期の御指導への感謝を終生忘れることが出来ない。このことについては、いつか別の機会に語ることもあろう。<sup>1)</sup>ともかく、このような次第で、寄稿の志は募るけれども、学問の世界から離れて久しい私には、先生に満足していただけるような新しい研究の成果などはなく、その日その日の臨時的な牧会・伝道に忙しい今の生活の中では、文献的な基礎付けの確かな新しい研究をまとめる時間もない。先生は、博士課程修了の頃、私に、「原田君、研究と教育と伝道、そのいずれをも放棄せず、併せ究めるようどこまでも努めてもらいたい」と、くり返しお勧め下さった。私もまたそのことを望み、志したが、かえりみて、学者と牧師の仕事の領域の違い、また両立の困難を今更ながら痛感する次第である。

ところで、私は、学部卒業論文を「キェルケゴールにおける同時性の問題<sup>2)</sup>」と題して、聖書の歴史的批判的研究が盛に論議された六〇年代の学的状況に揺り動かされながら、信仰の飛躍と信仰の倫理におけるキリストとの同時性の問題を扱った。修士論文では、「終末論における将来的なものと現在のなもの」という論題のもとに、聖書の終末論を基礎作業として学おと共に、現代神学における終末論についての諸学説（A・シュヴァイツァー、ブルトマン、アルトハウス、ブルンナー等）を渉漁して、類型的にその要点をまとめ、私自身の実存的な信仰の課題として、終末論における将来的なものと現在のなものという二つの契機をどう統一的に受容すればよいかを模索探求した。思えば、武藤先生の御指導のもと、私の人生において、もつとも余念なく、研究に集中した時期であった。博士課程に進んでからは、主の召命の自覚が深まり、自分は将来伝道・実践の領域に進むべきではなかるうかとの内的な迫りをややに強く覚え、その日に備えてキリスト教と諸宗教の関係の問題に、原理的にも個々の諸宗教との関係についても確

かな理解と判断を得たいとの願いを持ちつつあった。その時期に有賀・武藤両先生のお勧めにより、約一年半日本基督教協議会（NCC）宗教研究所の助手を、有賀所長のもとで務めることになった。この期間に、所長の使い走りしながら、仏教、神道をはじめ諸宗教の現場の指導者、学者に直接お会いしたり、お話を聞く機会に恵まれたことを深く感謝している。私は、当初、まず日本の諸宗教の研究に向かう前にアウグスティヌスの研究に向かい、古代キリスト教世界におけるキリスト教と地中海世界の諸宗教との信仰的、思想的、神学的接触の問題を確かめ、それをふまえて現代におけるキリスト教と諸宗教の問題に入っていきたいという願いをもっていたが、研究所の雑務もそれなりに忙しく、古代世界におけるキリスト教と諸宗教の問題という龐大な世界に踏み込むことはさしあたりその時点では断念せざるを得なくなつた。結局博士課程単位修了に際して、「キリスト教と諸宗教の原理的關係について」<sup>3</sup>をまとめ、その後、主に宗教研究所での探求をふまえて「浄土系仏教とキリスト教の救済論の一異に関する考察」<sup>4</sup>を個別的諸宗教とキリスト教との神学的・宗教哲学的視点からの比較研究の最初の成果として発表した。しかし、前述の通り、多忙な伝道・牧会の道に踏み出したため、私の研究はここで中断し、最初の成果は、最後の成果となつてしまつた。脳中には、神道、禅仏教のことなど、学び、思索し、発表したい数々の課題が去来したが、人生の残り時間もややに縮まってきた今となつては、それらも、もはや見果てぬ夢として断念せざるを得ない。しかし、私にとつては、学問研究は、もともと業績発表を主たる目的とするものではなく、信仰を確かなものとし真理を究めんとする探求・求道の営みであつたのであるから、研究の中断もまた主の御旨のうちに計られたものと思ひ、感謝して受容する次第である。いずれにせよ、拙き歩みとは言へ、これらの研究のすべては、武藤先生の御指導のもとになされたことを思い、改めて心から深い感謝を覚える。

さて、右の諸研究のうち、学部でのキェルケゴールの研究、諸宗教との関係の研究は、自分なりに論文として発表する機会に恵まれたが、終末論に関する論文だけは、気になりながらも今日までその機会をえず、そのままになっていた。この記念号への寄稿の依頼があつたとき、私は、この機会にこの課題をもう一度とりあげ、思索をまとめてみることは、先生への感謝を表わすのにふさわしいであろう、と考えた。しかしながら、広く新しい文献にあたり、文献的基礎づけの確かな新しい論文を書く時間的余裕は、全くない。修士論文は、四百字詰原稿用紙百枚であるが、今求められているのは、四〇枚である。昔読んだ文献をいちいち確認しながら、これを再構成する時間すらない。困つた、と思ひながら、<sup>まよてい</sup>筐底を探索していると、「終末論における将来的なものと現在のなもの」と題する二〇枚の完成原稿が出てきた。一九六三年十一月十七—十九日、西南学院大学で開かれた第十一回日本キリスト教学会の全国大会で研究発表したものであり、私の修士論文の要約である。若い駆け出しの時代であつたから、未熟ではあつても真剣に取り組んだものである。これだ、これにしよう。本論についての私の構想は決まつた。まず、この論文を再吟味し、今気付く明らかな誤謬や、足らざるところを改める。それは、三十余年前の論文だが、この問題に対する基本的課題を提示することが出来るはずである。そこで、加筆修正したこの論文を次章に掲げる。これを基本的な問題提出として、それから三二年、キリスト者、牧師として、聖書に学び、説き明かし、人生を経験し、思索してきた私が、武藤先生のこの主題に関する主要な論文<sup>5</sup>を読み返しなが、この主題について今達し得ている信仰と思想を自分の言葉でまとめてみる。ここでも、時間的制約のため、それ以後三〇年間に発表された諸研究の成果を涉漁し、文献的に基礎づける作業は出来ないけれども、この課題についての私の探求、思索の成果をまとめてみることは出来る。学術論文としては、不備であるかも知れないけれど、自ら思想家であられた武藤先生は、御生前のあの温顔をもつて、受容して下さるのではなからうか、と思う次第である。

## 二、終末論における将来的なものと現在のなもの

はじめに新約聖書の終末論に関する現代神学の諸傾向を、A・シュヴァイツァー、R・ブルトマン、E・ブルンナーなどを媒介として、極めて概括的に一瞥してみたい。

(A・シュヴァイツァー)

アルベルト・シュヴァイツァーは、一九〇一年、『メシア性の秘密と受難の秘儀』<sup>5</sup>においてイエスの終末論を、一九三〇年、『使徒パウロの神秘主義』<sup>7</sup>において使徒パウロの終末論を、いずれも福音書及びパウロ書簡が書かれた歴史的精神的環境に即して、つまり、時代史的に制約されたありのままの姿において、歴史的に忠実に理解しようとした。それによると、新約聖書の終末論は、全体として後期ユダヤ教の強い影響のもとにあり、この点ではイエスもパウロも一致している。然るに、イエスは、宇宙的破局を伴う世の終わりとしての終末は目前に迫っており、彼の贖罪の死は、迫ってきている神の国の招来を促進すると考えたのに対して、パウロは、「キリストと共に死にかつよみがえったもの」は、将来的な神の国を信仰においては既に現的に先取しており、未だ隠された形においてではあるが、神の国は事実上到来していると考えた。この相違は、イエスの十字架の死と復活を経過したという時間の推移、及び期待された再臨の遅延に基いて必然的に起こってくるものであるが、それにもかかわらず、パウロの終末論は、黙示終末論的な将来の待望に徹底的につらぬかれており、この「すでに」と「未だ…ない」との緊張のうちにパウロ的な信仰神秘主義が存在しているとされる。然るに、一九五三年、『終末論の変遷における神の国の理念』<sup>8</sup>において、

キリスト教の終末論における将来的なものと現在のなもの (原田)

彼は、新約聖書の終末論を時代史的に制約されたありのままの姿において学問的に探求した結果導き出された彼のいわゆる徹底的終末論に対して、二十世紀の神学者又信仰者としての彼自身の態度を明らかにしている。本書において彼は、キリスト教の歴史を、神の国の理念の非終末論化ないし貧弱化の過程としてとらえ、原始キリスト教及びパウロにおける神の国の間近かな到来への期待は、パウロ後においては、はるかな未来の期待へと転変したと考える。かくて近代プロテスタントのキリスト教は、神の国理念の非終末論化とそれに伴う人生・世界肯定の思想を受け入れ、人生・世界否定と徐々に訣別してきた。かくて近代プロテスタントの信仰においては、神の国は、終末論的な宇宙的規模の出来事として、いつの日かひとりでに到来するといったものではなくなって、信者が倫理的な努力によって、この世界の中に実現すべき、非終末論的な、精神的、倫理的なものとなることによって、新たに生命をとり戻した。かくてシュヴァイツァーによれば、「われわれはもはや、先立つ幾世代の人々のように、時の終わりにひとりでやってくる神の国を信じて満足することはできない。今日人類は、神の国を実現させるか、滅亡するかの瀬戸際にある。われわれが危機におかれているが故に、われわれは神の国の実現を信じ、そのために真剣にならざるを得ないのである」とされる。即ち、彼によれば、当時の時代史的制約の中でイエスやパウロがいだいていた黙示文学的な将来の終末論は、「もはや真理として感じがたく、もはやわれわれに消化できないような過去の考え方」なのであって、現代においては、来世的な神の国の到来を待望するのではなく、聖霊において始められた神の国を、信仰者の倫理的な努力によってこの世界の中に実現しなければならぬとされる。

以上のようなシュヴァイツァーの結論は、出発点において大いに異なっているにもかかわらず、その結論においては次にのべるブルトマンと相通するものをもっているように思われる。

(R・ブルトマン)

ブルトマンは、後期ユダヤ教の黙示文学的終末論を、今日の人間にとつては既に過去の世界像に属する神話論的世界像であり、それ故に、これを実存論的に解釈しなければならぬと主張するのであるが、その際は、これらの神話論的終末論の非神話化が、期待された再臨の遅延に伴つて、既にパウロにおいてはじまり、ヨハネにおいて徹底されてゐることを強調する。即ちブルトマンは、「ヨハネ伝においては、およそ黙示文学的終末論は削除されてゐる」と述べ、「ヨハネは、未来の宇宙的できごとへの期待、パウロがなお保持してゐる期待をすてている」と極言してゐる。勿論ブルトマンと云えども、第四福音書には、伝統的な黙示文学的終末論を含む節が存在することを否定することは出来ない。しかし彼は、「これらの節はこの福音書の教会的な校訂により後から附加されたものである」としてこれらの箇所を削除してしまふ。かくてブルトマンにおいては、現在生起しつつあるものとしての終末論的現在のみが強調され、「凡ゆる瞬間は終末論的な瞬間であるという可能性をもつており、キリスト教信仰においてこの可能性が実現される」と云われる。たしかにヨハネ福音書においては、永遠の命の現在の所有が強く主張されてゐることは異論はない(ヨハネ三・一五、一六、三六等)が、しかしそれだからと云つて黙示終末論的諸章節を後代の附加として削除してしまうことには、アルトハウスをはじめ、ムスナー、ウエーバーなど多くの人々が反対してゐる。ウエーバーによれば、ヨハネ福音書における黙示文学的諸章節を後代の附加として削除することは不可能であり、「救いの現性が神の将来の神秘主義的な先取である (Heilsgegenwart ist „mystische“ Vorausnahme der Zukunft Gottes) と云ふことは、ヨハネにおいても止揚されてはいない」。ヨハネにおいても、原始キリスト教的信仰を支配してゐる終末論と神秘主義の内的統一は存在するのであつて、これを希望の神秘主義として特色づけることが出来るのである。私は、

ヨハネ福音書における黙示終末論的諸章節がはたして後代の附加であつたか否かを自分で原文批判を試みることによつて判定する力がないが、たとえ附加であつたとしても、それが附加された形で正典性をもつに到っている以上、ブルトマンは、新約聖書の実存論的解釈という自らの主張の出発点に忠実であらうとすれば、これを解釈すべきであつて削除すべきではなかつたであらう。彼は、自らの非神話化の理論を正当化しようとして、正典としての聖書を主観的に読み込む結果を招いているのではないであらうか。シュヴァイツァーは、自らの神学の方法において、時代史的に制約された歴史的真理をそのものとして探求する態度を貫くことによつて、まさしくこのようなやり方に反対し、我々近代人の宗教的な考え方と歴史的に過ぎ去つた時代の人々の宗教的な考え方を混同するやり方を斥けたのである。<sup>99</sup>そしてここに彼の大きな功績があることは云うまでもない。かくてシュヴァイツァーは、イエス及びパウロの終末観が後期ユダヤ教の黙示文学的終末論の強い影響下にあることを強調するのであるが、シュヴァイツァーにとつても原始キリスト教のこのような終末観は、結局は過去の世界像に属するものであり、ブルトマン的に云えば、これらの過去の神話的諸表象は非神話化され、解釈されることによつて、その不変の精神的意義のみが生かされなければならぬとされる。その結果、結局、黙示終末論的な将来における神の国待望の契機はすて去られ、信仰において神の国の到来にあづかつた信者たちが、彼らの努力によつて、この世界の中に神の国を建設することが、現代における神の国の正しい把握であるとされるに到る。ブルトマンにおいては、シュヴァイツァーが目指しているような理想世界としての神の国 (*in Patristia, tot Deo, Kingdom of God*) をこの世界の中に実現するという思想は乏しい。その点においては、両者の思想的強調点は異なるが、新約聖書を支配している後期ユダヤ教の黙示文学的終末論が、過去の世界観に属するものとして、もはや、現代の宗教的思惟にとつては無意味であり、受け入れがたいという結論にお

いては共通しているように思われる。しかし、事態はたしてそのように単純なのであろうか。黙示終末論的な将来の信仰は、現代の宗教的思惟にとっては、もはや値打ちのないものであるかであろうか。

(黙示文学的終末観の概要)

私達は、第三の立場を代表するものとしてのブルンナーの立場にうつる前に、黙示文学的終末観は、はたしてその本質上、過去の世界に属する神話論的世界観にすぎず、従って知性の犠牲 (sacrificium intellectus)<sup>(2)</sup> なしには受け入れられないものであるか否かという根本的な問いを問わなければならない。<sup>(2)</sup>

一体捕囚期迄の預言者は、ダビデの血すじから出るメシアを、神によって油そそがれ、公平と正義をもって国を治める平和の君 (イザヤ書九・五―六、その他イザヤ書七・十四、十一・一―一〇等) として待望した。バビロン捕囚という歴史的試練を体験した第二イザヤにおいては、メシア像は苦難の僕 (イザヤ書五二・一―五三・一二ほか) へと変貌するのであるが、そこでもなお、神の国は、歴史内的・世界的将来における実現を期待されているにすぎない。然るに、紀元前四五〇年頃に記されたマラキ書において、黙示終末論的な審判思想が、紀元前三〇〇年前後に記されたイザヤ書二四―二七章において、復活思想 (イザヤ書二五・七―九) が、はじめてあらわれてくる。そして、セレウコス朝シリアの王安ティオカス・エピファネス四世 (Antiochus IV Epiphanes 175-164BC) のユダヤ教迫害によって起こったマカベウスの反乱 (167-155BC) に前後して記されたダニエル書において、初めて明確な黙示文学的形式のもとに、世界史に対する究極的な神の審判の思想があらわれ、それに伴って御国の概念が超越化され、「多くの (ダニエル書十二・二) 死者の復活と永遠の命への言及がなされるに到るのである。しかもなお、A・ジェフェ

リーが言っている通り、ダニエルは、我々が新約聖書やいくつかの黙示文学諸書において持つような「すべての」人の復活を考えるとところまではいかなくなつた。新約聖書におけるイエス・キリストの復活を経験することによって、ヨハネ黙示録は、初めてはつきりとすべての死人の復活を宣言することが出来たのである（ヨハネの黙示録二〇・十一—十五）。ダニエルにおいては、終りの時は未だ来ず（ダニエル書十一・二七、三五）、黙示の言葉は終わりの時迄封じておかれねばならなかつた（ダニエル書十二・四—九）。然るにヨハネ黙示録においては、小羊なるキリストの血の贖いによつて「事は成就し」（ヨハネの黙示録十六・十七、二二・六）、神の国は信する者のただ中に実現している。終わりの時は近く、預言の言葉はもはや「秘密にしておく」必要はない（ヨハネの黙示録二二・十）。しかもなお、キリスト者は迫害と殉教を忍耐しつつ、神の国の将来を待望する。しかし彼らは、既に「永遠の命を得ている」者として、神の国の全き到来、新天新地の到来を待望するのである。今は小羊なるキリストとの婚約の時である。花嫁は、信仰においては既に花婿を得ているのである。しかし、彼はなお、事実においてはそれを得ていない。やがて「小羊の婚礼の日」（ヨハネの黙示録十九・七）がきて、新しいエルサレムはその全き姿をあらわすであろう。その日迄、花嫁は迫害と試練の中で、信仰において永遠の命を生きているのである。

さて、以上に見てきた通り、黙示文学において初めて、これまでのイスラエル民族中心の世界観が克服され、「世界史」の思想、従つて世界史の時間的空間的な拡がり全体に対する神の摂理の支配という思想が明確になる。即ち、「歴史が展開し、時の舞台に相ついで帝国が興亡する時、もろもろの国はそこにおいて神の永遠の目的が進展しつつある歴史の全体における一つの役割を演じるのである」<sup>22</sup>。従つて、今やパレスチナの小国の歴史は、それ自体において重要ではなく、世界史との関連においてのみ、その重要性が見出されるに到る。その際、歴史の舞台としてのこの

世界は、いわゆる神話論的な天界・大地・下界の三階層的構造をもつものと考えられ、歴史を目的へと導くために、超人間的な天来の諸力が善悪共に顕われて、神の国を実現するために戦う。かくて黙示文学においては、天使や悪魔の思想が活発にみられる。これらの考え方は、確かに古い世界像に属するものであるが、迫害のもとにあった当時の緊迫した状況をかえって如実に伝えてくれるものとして、正しく解釈されねばならない。

さて、以上のような世界観の当然の帰結として、黙示文学においては世界史の終結（「世界の終わり」）、「終わりの時」の思想が明確になる。勿論ダニエルにおいては、世の終わりは、アンテイオカス・エピファナスに対するマカベウスの勝利につづいて、ヨハネ黙示録においては、ドミティアヌス皇帝の迫害の終結につづいて、ただちに到来するものと期待されており、その限りでは彼らの預言は実現しなかったのであるが、このことは世の終わりの思想そのものの真理性を否定することにはならない。一体、預言は、その本性上、それが実現したか否かによってその真理性が保証されるのではない。黙示文学における世界史に対する神の審判、超歴史的な彼岸の世界の希望と死者の復活の預言の発展は、イスラエルの民の歴史的宗教的体験が深まるに伴い、移ろうもの、滅びゆくものとしてのこの世界に対する認識・自覚が徹底的に深まり、歴史内的な将来における神の国実現の不可能性が深く自覚されるに到ったことを意味するのではないだろうか。平和の君としてのイザヤ的メシア像が、バビロン捕囚の体験を経て苦難の僕の預言へと深められたように、初期の預言者的な神の国の理念は、アンテイオカス・エピファナス四世のユダヤ教迫害の中で、超越的・彼岸的な神の国の理念へと深められたのである。御国の概念の超越化は、むしろ選びの民イスラエルの歴史体験の深化と連動する啓示の進展として理解すべきである。私達は、これを、歴史的に神の国を実現出来ると主張するあらゆる試みに対する不断の警告として受けとめるべきではないであろうか。私達は以上のような一瞥を通

して、黙示文学的世界観ないし終末観は、表面上神話論的な世界観に支配されているにもかかわらず、内容上は、深い歴史的・宗教的体験の只中に啓示された不滅の真理を内包していることに気付くのである。確かに黙示文学は解釈されねばならない。しかしそれは今日においても削除されてはならない。黙示終末論についても同じことが言えるのである。それは決して過ぎ去った過去の世界像に属するものとして捨て去られてはならない。たとえ、ヨハネ伝とヨハネ黙示録の著者が異なっており、ヨハネ伝における黙示文学的諸章節が後代の附加であつたとしても、何故それを削除しなければならぬのであろうか。否、これらの黙示文学的諸章節の存在によって、ヨハネ伝ははじめてその永遠的な価値を獲得し、その現在の終末論はいよいよ輝きを増すに到るのである。

(E・ブルンナー、P・アルトハウス)

さて、ブルンナー<sup>23</sup>及びアルトハウス<sup>24</sup>を中心とする第三の立場は、自己の実存の課題として終末論における神の国の現在の契機と将来の契機とを共に尊重し、何らかの仕方で両者を総合止揚することによって、現代の信仰にとって将来の終末論のもつ積極的な意味を明らかにしようとするものである。即ち、ブルンナーは、一方において、キリストと共に死にかつよみがえることによって永遠の命に現在のにあずかるあのパウロ的な現在の終末論の契機を強調し、それをシユヴァイツァーと共に、キリスト神秘主義と呼ぶことを是認しつつも、この言葉の招きやすい誤解を避けるために、「この『神秘主義』すなわち無媒介性 (Unmittelbarkeit) は、同時に最高の意味で媒介性 (Mittelbarkeit) であり、一回的な歴史的出来事であるということをも十分考慮しなければならない」と指摘している<sup>25</sup>。しかしながらブルンナーは、キリスト教信仰における終末論の問題を、単に現在の終末論に解消することをせず、将来の終末論のもつ現代的意義を力説して次のように云っている。「このように再臨の思想と必然的に結びつけられている歴史終末の

思想が、近代的世界像からみれば不条理としてしりぞけられねばならないかどうかという問題に対して、わたしたちは「それは全く反対である」と答えねばならない。人類の歴史の認識に基いて、歴史の終末というテーマに関して云おうとするとき、それは、何ら矛盾ではない<sup>28)</sup>。ブルンナーによれば、この思想は決して不条理 (absurd) ではなく、近代科学的教養をつんだ人間がそれをすてなければならぬようなものではない。

私達はむしろ、キリスト教終末論における現在のなもの、或は、将来的なものの一方のみを不当に強調したり、何らかの仕方では神の国がこの世に実現すると期待したり、将来の終末論を認めてもこれを個人の死と復活の問題に解消したり、或は歴史の終末におけるキリストの王国の出現を一方的に強調するなど、一切の片寄った主張を斥けなければならぬ。更には、終末の神の国の到来の時や場所、又、その内容を微細にわたって図式的に明らかにしようとして、究極兵器の出現による人類破滅の危機をキリスト教終末論に安易に結びつけようとすることも慎まなければならない。

#### (結論)

それでは、一体、我々は、どのような意味で終末論信仰を把握し、これを宣教の内容とすべきであろうか。それは既に明らかである。即ち、一方、「キリストと共に葬られ、……キリストと共に復活させられた者」(コロサイ二・十二、三・一ほか)は、この現在の生のただ中において「永遠の命を得ている」(ヨハネ三・三十六)。即ち、「神の国はあなたがたの間に(口語訳「ただ中に」)ある」(ルカ十七・二二)。しかもなお、それは隠されて (verborgen) おり、黙示終末論的な世の終りの到来において、初めてあらわれてくる。しかし、「その日、その時は、誰も知らない」(マルコ十三・三三)。既に「永遠の命を得ている」信者は、天のエルサレムを待ちのぞみつつ、永世への信仰において、時

の充実<sup>29)</sup> (die Fülle der Zeit) としての終末論的瞬間をキルケゴールのいう卑賤の様におけるキリストとの同時性<sup>30)</sup> において生きるのである。私達は、これを信仰神秘主義、終末論的神秘主義と呼び、ウェーバーにならって「希望神秘主義」と呼ぶことも出来よう。私達は、信じてはならぬものを知性の犠牲において信ずべきではないが、正しい信仰の逆説を非神話化や新しい時代の世界観という美名のもとに、知性へとひきずりおろしてしまふことを厳に慎むべきである。新約聖書が明らかにしているような信仰神秘主義、希望神秘主義における終末論の将来と現在との総合は、それ以前のイスラエル宗教史にあらわれた終末論の諸契機を見事に総合止揚したものであつて、今日においてもいささかもその価値を減ずるものではない。然るに現代のキリスト教は、現在の終末論を強調するには極めて勇敢であるが、将来の終末論(来世信仰と世の終わり)を強調するには極めて臆病であり、遠慮がちであり、自信のない態度をとっている。だが現在の終末論の一方的強調は、結果からみて、現在の終末論のもつ生命力を奪いとつてしまい、終末論は全体として迫力のないしぼんだものになつてしまつてゐる。徹底した来世信仰に生きることは、決して転倒した逃避的な信仰として責めらるべきではなく、むしろ、そのことによつてかえつて現実に対して捨て身の戦う信仰の立場が生まれてくるのである。この世界を終末論的に生きることと、来世への清い信仰に生きることとは二にして一である。キリスト教信仰は、いつも変わらず希望を説きつづけなければならぬ。ダンテは「神曲」の地獄の門の入口に、「われを入れるものは一切の希望をすてよ<sup>31)</sup>」と記している。希望を失つた終末論はもはや終末論ではない。神の国の將來の思想は、今日なおその眞理性を喪失するものではなく、信仰と神秘主義、希望と神秘主義の逆説的統一としての信仰神秘主義ないし希望神秘主義は、新約聖書にもとづくキリスト教終末論の不滅の眞理である。従つて今日、神の国の現在性と共に、その隠蔽性を伴う将来待望の終末論を信仰の告白として強調することは、信仰の正しい姿の回復

のために不可欠の緊急課題である。

### 三、主題についての今日の私の信仰と理解

武藤先生の御指導のもとに、二五歳の時にまとめた修士論文の骨子を、五七歳の今読み返す機会を得て、先生への感謝の念と共に、個人的に懐かしい思いがこみあげてくる。本稿の注(5)に挙げたこの主題に関する武藤先生の論文を読み返し、本稿と読みくらべてみると、本稿に対する先生の思想・信仰の影響には歴然たるものがある。本稿執筆の時代は、講義で注(5)④が講じられ、注(5)①の論文が公にされて間もない頃であった。

それはさておき、ここに述べた論旨・主張については、その結論の荒けずりで若々しい勇ましさに、我ながらいささか驚きを覚えながらも、大筋において私の考えは今日も変わらない。しかし、ひたすら聖書の説き明かしに携わって三〇余年を経た今、時代も変わって世紀末となり、私の人生もこの世での残り時間が日に日に縮まり、この世での生の終わりの近いことを切実に思う年令となった。そこでこの間の聖書の学びと見聞と体験と思索をふまえて、今思うところを紙数のゆるす限り手短かに述べて、若き日の拙論を補足したいと思う。

まず、現在の終末論重視への傾斜は、たとえば最近の業績の一つである大林浩「死と永遠の生命——そのキリスト教的理解と歴史的背景——」(新教出版社、一九九四年)等にも見られる。大林氏によれば、永遠の生命とは、結局、「愛の人格的具体化」(同書二六三頁)である。このようなキリスト教終末論の現在の終末論への解消の傾向は、ここ三〇年の神学界の流れにおいても変わらない。終末論におけるこの契機の尊重は、それが本質的に心靈上の事柄に属

するため、自然科学的世界観と直接的に衝突することがなく、従って、これを信受することに一応は「知性の犠牲」を強要されることもない。このことが、終末論におけるこの契機の受容を容易にしている一因であると思われる。しかしながら、シユヴァイツァーにおいても、これは、信仰神秘主義として理解されている通り、今既に「永遠の命を得ている」ということは、信仰による神秘の体験であつて、反知性的に知性と衝突するのではないが、超知性的に知性を超える靈的な世界の消息である。従つて、現在の終末論の受容は、聖靈論、聖靈体験と密接に結びついており、必ずしも知性の立場で納得することの出来ない信仰の世界の消息である。

次に、黙示文学において明確に語られるような将来的終末論は、自然科学の著しい發達によつて実証的に解明されて来た今日の宇宙観、自然観、世界観、生命観等々と聖書の文字通りの使信では共存出来ないことは、明らかである。仮説ならばともかく、実証的に解明された自然科学上の事実は、聖書の御言葉によつても、信仰的確信によつても否定出来ない。そこでシユヴァイツァーのように、時の終わりにやつてくる來世的な神の國の到來の希望は、もはや放棄し、聖靈において始められた神の國のこの世界内における實現、また各自の靈的な世界における永遠の生命の現在の保持・体験のみを尊重すべきであるとする主張が生まれ、多くの人々に支持されるのである。

確かに、聖書は、古代人の宇宙観、生命観等の枠内で書かれた文書である。その限りでは、それは、少くとも非文字化され、解釈されねばならない。しかし、聖書全巻を巨視的に俯瞰するとき、それは、神話（創世記一―三章）に始まり、歴史を物語り、福音を告げ、黙示（ヨハネの黙示録、特に二―三章）に終わっていることがわかる。また聖書巻頭の一文は、「初めに、神は天と地とを創造された」であり、黙示録二二章には、「わたしは）初めであり、終わりである」と記される。地上での人の命に初めがあり、終わりがあることを誰も否定出来ない。悠久の天地などの

言葉もあるけれど、人類史、地球史、宇宙史にも初めがあったこと、終わりがあろうことも、私共は、認め、また予感せざるを得ない。わかりやすく書かれた自然科学の本をみると、一五〇億年の宇宙の歴史、四六億年前の地球の誕生、三五億年前の生命の誕生、五〇〇万年前の人類の誕生、……というような数字が出てくる。<sup>29)</sup>世の初め、とか世の終わりということは、こういう抜かりをも視野に入れて考えなければならぬ。しかし、それが、計量的にどれほどながい時間であろうとも、人生が、誕生と死の間の短い時間であるように、人類史、地球史、宇宙史もまたその始源と終末の間に浮かぶ時の間の出来事である。そして、その時の間の出来事（即ち歴史）は、実証的研究や記述の対象となり得るけれども、その始源と終結、そしてそれ以前とそれ以後（それはもはや時を超えているので、「以前」とか「以後」という時に関する用語では表現出来ないのだが）の世界は、歴史としては記述できず、科学では実証出来ない。このような世界の始源を、聖書は、神話という文学形式で表現し、その終末を黙示（アポ・カリユプシス、revelation——おおいを取る）こと、ヴェールをとり除くこと）という文学形式で表現したのである。そして聖書全巻の結語は、キリスト再臨への希望と恵みの支配への祈願（ヨハネの黙示録二二・二〇——二二）である。「初めに、神は天と地とを創造された」との巻頭の一文も、それに続く創造神話も、終末の黙示も、聖書記者の体験を物語る実証的記述ではなく、信仰の告白である。「主は、とこしえにいます神 地の果てに及ぶすべてのもの造り主」（イザヤ四〇・二八）の信仰にたつて、聖書執筆当時の宇宙観、自然観、生命観という時代的制約の中で、聖書記者たちは、創造と終末についての信仰を告白したのである。

従つて、聖書に記されている黙示終末論の世界観は、なるほど過去の世界観に属するものであり、これを今日そのままの形でまると私共の信仰の内容とすることは出来ないけれども、その枠を用いて語られている始源と終末につ

いての信仰——即ち世界に初めがあり、終わりがあり、神は、初めをも終わりをも越えて存在し、支配したもうこと、そして、時空の彼方にも、なお何らかの新天新地の将来があり、私共は世界についても、個人の生命の将来についても、そこに希望を託して、今の時を生きるということ——は、これを今日の私共の信仰として受容し、継承することが出来るはずである。

昨年（一九九五年）は、阪神・淡路大震災、オウム真理教の一連の事件、中国・フランスの核実験再開等により、世界の終末の問題が、身近な話題として世の関心を呼んだ。前述のように、キリスト教神学の世界では、終末論の将来的契機は、重視されず、むしろ排除される傾向にあるなかで、巷で人の心をひきつける新々宗教等の現場では、一種の黙示終末論的な教義や主張が、くりかえし流行する現実をも、私達は、まじめに受けとめなければなるまい。しかし、新々宗教等にしばしば見られる〇〇年に世界最終戦争云々というような性急な終末切迫の自覚や終末待望論は、自然観においても世界史や救済史の理解においても、あまりにも稚拙なものが多い。このような宗教や思想に多くの人々が心ひかれる現状に心を留めつつも、私共は、今日の自然科学的な宇宙観や生命観、またその実験的な研究の成果にも興味をもち、世界史についての洞察をも絶えず深めながら、死と復活、終末と再臨について、たえず聖書に立ちかえりつつ、確かな理解と信仰を深めていきたいと思う。終末論に関する武藤先生の論文は、どれも現在の終末論と将来的終末論という終末論の二類型、更には終末論の第三の形態とも言うべき、個人の死後直ちに神の国に入られるという考え方が、「相反的なものの緊張的統一として一体的に把握されねばならない」という主張を結論としてしているが、私もまた、その主張に共感を覚える者である。

私は、十九歳の入信の時から、この問題を私の信仰ととって大切な問題として受けとめ、二五歳でともかく修士論

文として、達したところをまとめ、以来三〇余年、この問題を考えつづけてきた。このことを思いめぐらすなかで、私の思いは、いつとはなしに、この主題に対する私の最終の立場は、主イエスの次のみ言葉に、わが思い、わが生涯を託することに尽きる、との思いに収斂<sup>れん</sup>してきた。

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」(ルカによる福音書 三三章四六節)

この言葉は、主イエスの十字架上の七言の一つ、そしておそらく七番目の、つまり最終の御言葉である。主イエスのこのみ言葉において、終末論の二類型は、統一的に受容されることになるのではないだろうか。死と永遠の生命について、世の終わりとキリストの再臨について、私達は、私達にゆるされる限りの知的努力を傾けて探求し、模索することは、ゆるされることであるし、また望ましいことでもある。しかし、それはどこのつまり私達の知的理解の限界を越えた黙示の世界である。使徒信条が、「(主は) かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん」と信じて告白し、「(我は) 永遠の生命を信ず」と信じて告白している通り、最終的には、信仰的態度決定の問題である。私共は、人間であって、神ではない。限られた時空の中に生き、その認識能力にも神が定めたもうた限界がある。ただ、さし示された御言葉への信仰によつて、この限界を突破し、時空を越えた永遠・無限の世界を予感し、そこに飛躍し得るのみである。私共は、そのような人間の「分限」に甘んじるべきであり、それを越えるべきではない。それを越えて〇〇年が世の終わりなどと言い出すことは、すべて僭越の罪・高慢の罪(ヒュブリス)である。

御子であられた主イエス自らの地上での最後の御言葉を、私の生涯の最後の言葉としてそのまま全心全霊をこめて主イエスに語りかけつつ、この世の旅路を終えること、これが私の祈りであり、願いである。死後の世界、世の終わりと彼方の世界、結局は、わからない。わからないけれども、信じる。わかることは、「神が永遠の命をわたしたちに

与えられたこと」(ヨハネの手紙一、五・十二)であり、「御子と結ばれている人にはこの命がある」(同、五・十二)ことである。これは、信仰において体験出来る生命の世界である。日毎に縮まりゆく地上でのゆるぎされた日々を、この信仰にたつて、終わりまで歩み抜きたいと思う者である。

注

- (1) その間の経過と武藤先生による御助言の要点については、拙稿「いのちへの旅路」(『ヨシユアと共に』十一号、一九七五、ヨシユア会発行)参照。
- (2) 「キルケゴールにおける同時性の思想とその意義」(大阪府立工業高等専門学校「研究紀要」第8巻、一九七四年)。
- (3) 「出会い」第一巻四号、一九六七年九月、NCC宗教研究所。
- (4) 「基督教学研究」第6号、一九八三年十二月、京都大学基督教学会。
- (5) ①「終末論の諸問題」(『神学と宗教哲学との間』(創文社、一九六一年)所収)。  
 ②「終末論の二類型」(『神学的・宗教哲学的論集I』(創文社、一九八〇年)所収)。  
 ③「キリスト教における二重終末論」(『神学的・宗教哲学的論集II』(創文社、一九八六年)所収)。  
 ④「キリスト教における歴史観」(『神学的・宗教哲学的論集III』(創文社、一九九三年)所収)。  
 ⑤「キリスト教における死生観」(『同論集III』所収)。  
 ⑥ Albert Schweitzer: Das Messianitäts und Leidensgeheimnis—Eine Skizze des Lebens Jesu, 1901. シュヴァイツァー著作集(白水社)第八巻、邦訳の題は「イエス小伝」。
- (7) *ibid.*: Die Mystik des Apostels Pauls, 1930. 著作集第十・十一巻。
- (8) *ibid.*: (原題) Die Idee des Reiches Gottes im Verlaufe der Umbildung des eschatologischen Glaubens in den unschatologischen, 1953. 著作集第八巻。
- (9) 著作集第八巻、三三三頁。
- (10) 同、三三四頁。

「真宗学会大会」における講演に基づくもの。

- (11) ヘルマン・フルトマン『新約聖書と神話論』(山岡喜久男訳)五五頁。
- (12) Rudolf Bultmann: *History and Eschatology* 1955, Harper & Brothers, New York, p.47.
- (13) *ibid.* p.47. *Notel.* なほその例として、彼は「五・二二八に「*レ・ク・ユ一*」—五八を挙げている。
- (14) *ibid.* p.154.
- (15) Paul Althaus: *Die letzten Dinge* (Siebente, veränderte Auflage), 1957, Carl Bertelsmann Verlag, S.57f.
- (16) Franz Mußner: ZSH 1952, Karl Zink Verlag
- (17) H. E. Weber: *Eschatologie und Mystik im Neuen Testament*. 1930.
- (18) H. E. Weber: *ibid.* S.196.
- (19) シトウマンナー著作集第十巻、十七頁。
- (20) フルトマン『新約聖書と神話論』(山岡喜久男訳)三二頁。
- (21) 以下引用箇所についてはいささか詳細に列記しないが、黙示文書に関する以上の論議は、主として次の諸書から学べたものである。
- Interpreter's Bible vol. 6, The book of Daniel, (Introduction and Exegesis by Arthur Jeffery, Exposition by Gerald Kennedy).
- Interpreter's Bible Vol. 12, The Revelation of St. John the Divine, (Introduction and Exegesis by Martin Rist,
- Exposition by Lynn Harold Hougl).
- 矢内原均雄全集第九巻(岩波書店)『黙示録』、『黙示録研究』。
- (22) Interpreter's Bible, Vol. 6, p.351.
- (23) Emil Brunner: *Das Ewige als Zukunft und Gegenwart*, 1953, Zwingli Verlag, Zürich.
- (24) 本稿では、紙数の関係上、アルトハウスの所論について詳説出来ないうが、注15に挙げた彼の著書「Die letzten Dinge」は、終末論に関する名著であり、修士論文作成に際して、私は、この本から大変多くのことを学んだ。今日も本書の邦訳のないうことが、惜しまれる。
- (25) E. Brunner: *ibid.* S.122.
- (26) E. Brunner: *ibid.* S.140.
- (27) Sören Kierkegaard: *Philosophische Brocken*, 1844, S.16. (Eugen Diederichs Verlag, 1960)
- (28) S. Kierkegaard: *Einübung im Christentum*, 1850. (E. D. Verlag, 1955).
- (29) タンナ「神曲」地獄篇3・9 (筑摩書房版、世界文学大系の「野上素一訳」十一頁)。
- (30) 池内「*「父ちゃん」が話してくれた宇宙の歴史(全四冊)「瀬戸口烈司「人が歩んだ五〇〇万年の歴史(全四冊)」(いずれも岩波書店)。*
- (31) 武藤一雄『神学的・宗教哲学的論集II』一三六頁。
- キリスト教の終末論における将来的なものと現在のなもの(原田)